

幼いころから自分は他の人と違うな、という違和感があった。

幼稚園では脱走を繰り返し中退、小学校では嫌われ者、中高生になってからは流行りものが嫌いで、仲の良い友達と一緒にいても自分だけ馴染めていない感じがしていた。

他人とうまく付き合えない自分、という劣等感がずっと付きまとっていた。

そんな私でも好きになってくれた女性が現れ、私は彼女に夢中になった。10年ほど経ったころ、あるトラブルで彼女がノイローゼになり、それをなんとかしたいと奔走するうちに自分もノイローゼになっていった。仕事も忙しくなるとか気分を変えたいと思いつつも酒が飲めない私は、合法のものなら…と街で売っている「合法ドラッグ」に手を出したのがアディクトになるきっかけだった。

やがてそれが規制されることになり、どうせ違法になるのなら今より効き目の強いものにしてしようと覚せい剤に手を出したのだった。

使い始めてから一年もたたないうちに取引していたメールから足がついて逮捕された。

2002年の日韓W杯を留置所の中で聞きながら彼女や両親に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、裁判でも本当の涙を流し改心を誓った。

内縁関係だった彼女とは籍を入れ、引っ越しもして、いったん失った仕事もまた入り始め順調だった…はずなのに執行猶予判決をもらった三か月後にはまた覚せい剤を使い始めていた。後ろめたさや罪の意識よりも自分の心地よさを優先させていたのだ。彼女は段々と私の様子の変化に敏感になり表情や態度から使用を見抜くようになっていった。「今度使ったら離婚だからね」と言われもしたが、何度も何度も反省を繰り返すだけでやがてうやむやになっていった。

そんなある日彼女にがんの疑いがでた。医療に導こうとしたものの、彼女がパニックになり手に負えなくなってしまった。医療家系に育った自分は早期発見なら大丈夫だと何度も説得を

したが、その度にパニックを起こす彼女に疲れ果て、彼女の母親と「困ったねえ」と顔を見合わせるだけでどうすることもできなかった。彼女を失ってしまう恐怖を和らげるために、覚せい剤は必要だった。手放すなんて到底考えられなかった。

彼女が他界して一人になった私にとって、世界はすっかり色褪せてしまい、外に出てもそこには灰色の建物と顔のない人がいるだけにしか感じられなくなっていた。だから私は引きこもってひたすら覚せい剤を使い続けた。

4年半ほどそんな生活をしていた時、唯一薬物の使用を打ち明けていた友人に警察に通報されて二度目の留置所生活が始まった。コロナ禍で一人部屋の留置所では新聞すら回覧されず、読めるものは一日一冊の貸し出し図書のみで暇を持て余した。そんなときふと彼女の声が聞こえたような気がした。

「もう 20 年も覚せい剤を使ったんだからそろそろいいんじゃない？」

今回も執行猶予判決をもらい、兄に連れられてみのわマックにつながった。

覚せい剤止めなくちゃいけないんだろうなあ…そんなボンヤリした気持ちで入寮生活が始まった。そこには相変わらず人とのコミュニケーションがうまくできない自分がそこにいた。他の利用者仲間は楽しそうに談笑しているのに自分だけはうまく馴染めていないように感じていた。

職員には「大丈夫です」と問題なさそうに振舞った。できるだけ早く出ていきたいかった。三か月ほど経った頃 RD デイケアセンターで 12 ステップを学んできてはどうか？という提案をもらったのが転機になったように思う。学校の授業のような形式で 12 ステップへの理解を深めていくのは自分には合っていた。

ある日 AA のミーティングに通っていたときビッグブックの抜粋にあった「人間に対する恐怖症もなくなる」という部分が気になった。12 ステップをやっていけばそうなれるというのだから、それならば RD デイケアセンターでしっかり基礎を作っていこうという気持ちになっていった。

自分が生きづらいだなんて考えたこともなかった。

自立って一人で何でもできて誰にも頼らずに生きていくことだと勘違いしていた。

みのわマックに戻ってからファーストフード店で接客のアルバイトを始めるようになった。最初は怖かったが、恐れの反対には勇気を使うんだ！と RD で学んだことを使い、今日一日頑張ってみようと続けるうちに出来なかった事が出来るようになっていった。そんな自分の成長が嬉しくて、先ゆく仲間がよく自分側を見るプログラムとか、自分の取扱説明書ができてくるといったのが段々と実感としてわかるようになってきた。

今回 RD デイケアセンターで働くことになり、自分の経験がどれほどの役に立つかどうかは分からないが、もらったものをお返りする気持ちで今日一日を頑張っていこうと思う。